

もっとも大切な幼児教育

高校教育から中学教育へ、中学教育から小学校教育へと移って行った私は、今、大学教育にたずさわりながら、幼稚園教育にも力を注いでいます。

こうして幼稚園教育から大学教育まで、自分で一通りやってみますと、“教え育てる”という言葉が実際に当てはまって、教師の影響力の大きいのは、幼稚園から小学校の間までで、あとは、だんだん“教育”という言葉からは離れたものになっていくようです。

従って、教育として最もやり甲斐のあるのは幼稚園教育であり、それから上にいくに従って、教育の楽しみは薄れていくようです。

幼児は、教師の与えるものをそのままそっくり受け入れて育っていきますから、それだけ教師の責任は大きいと言えましょう。しかし、こういう責任のある仕事に従事する幼稚園の教師が、教育の世界では最も低いものに見られ、最も待遇が悪いのは、どうしたということでしょう。

教師の資質を向上させることを図ると共にその責任の大きいのにふさわしいだけの待遇を、国として考えるべきだと思います。つい先ごろのニュースで、国立の幼稚園教員養成課程の出身者が、ほとんど、待遇の良い小学校に流れて行って、幼稚園に勤めた者の極めて

少ないことを報じていました。

このようなことでは、国費で幼稚園の教師を養成する意味がないではありませんか。一般に、幼稚園の教師は小学校へ、小学校の教師は中学校へと、上級学校へ勤めたがる風潮がありますが、これは、教育のためには決して好ましいものではありません。

子どもの能力はあまり変化しない

私は、小学校で、一年生から六年生まで、一貫して担任をした経験があります。一年生の時に子どもたちに下した判定は、六年生になってもほとんど違いはありませんでした。

今の脳生理学が述べていますように、小学校に入学するころの子どもの能力は、その後の長い一生の間にも、ほとんど変化する余地のないまでに育っているのです。

私の経験でも、一年生の時に十の能力を示していた子どもは、六年生になっても十、八の子どもは八、五の子どもはやはり五、というのがほとんどです。

また、一年生当時、学業成績は今はそれほどでもないが、伸びそうだなと思った子どもはやはり伸び、反対に、今は学業成績は良いけれども、どうも伸びないのではないかと思った子どもは伸びません。

結局、一年生の時に教師が観察して得た子どもに対する判定は、六年間ではまず変わることがありません。恐らく一生を通じても変わることはあるまい、と私は思っています。

十の能力の子どもは六年たっても十、五の能力の子どもは六年たっても五、というのでは、何としても教育に当たる力として張り合いが少ない。教育者としては、もっと、良くも悪くもなる可能性の多い時期に、子どもを教育してみたい、とだれしも思うでしょう。また、そういう時期の教育こそ、ほんとの教育だと思うでしょう。とすれば、小学校以後には、ほんとの教育はない、ということになります。では、幼稚園がほんとの教育かと言いますと、どうも幼稚園に入園するまでの間にすでに決まってしまう、というように私には思われるのです。

幼稚園に預けられている間に、どれだけの変化があるでしょう。勿論、肉体的にも精神的にも大きな変化はありますが、それは成長が著しいということであって、教育による変化とは違います。幼稚園の教育の影響力は、小学校と比べて、五十歩百歩の差に過ぎないと思うのです。

真の教育は家庭にある

とすれば、「真の教育は家庭にある」ということになってきます。事実、私は、幼稚園教育から大学教育までを通してやって来た経験が

ら、「教育は家庭のものだ」とつくづく思われることばかりです。

チンパンジーやオランウータンは、生まれて数か月の間は、人間の子どもよりも賢く立ち回ります。しかし、彼らの生活は、百万年前のそれに比べて、一步も進歩していません。

人間だけが、自分の一生の間に得た知恵を子どもに教えることにより、偉大な進歩を遂げ現代の輝かしい文化を築き上げました。これこそ、教育の力であり、その教育は、「親が子を教える」という形で行なわれて来たものです。

職業を世襲する価値

私が、職業を世襲することの価値を再認識する必要があると説いたことには、こういう背景があるわけです。と同時に、教育の責任者としての“親の覚悟”を覚悟する必要があることを皆さんに訴えたいのです。

昔から、「瓜の蔓には茄子はならぬ」と言われています。親が子どもにどんなに期待したところで、親の与えるものしか吸収できない子どもには、親自身が向上する姿勢を子どもに示さない限り、期待はずれに終わるのは当然と言わなければなりません。

(「教育新聞」昭和45年1月31日号～同年5月30日号)